
鳥人の森

深水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳥人の森

【Nコード】

N9099B

【作者名】

深水晶

【あらすじ】

孤児の少女アグネ・シャが住む村の近くに、人を襲って食らう鳥人が棲むと言われる森があった。村の大人達には内緒で森に入り、稀少で高価な花や薬草を採取していた少女は、ある日森の中で、一人の少年に出会い……。

村の東の森は、鳥人の森と呼ばれていた。そこには鳥人と呼ばれる翼を持つ一族がいて、迷い込んだ人を食うという言い伝えられていた。

村の少女アグネ・シャは迷信だと気にも止めなかった。村の大人達には内緒で一人森に入り、誰にも邪魔されずに花や薬草を採取しては売っていた。

村にはこれと言った産業はなく、土地は痩せており、村人の多くは出稼ぎに行くか、近隣でとれたものを細々と売ったり加工しては生計を立てていた。

時折村人に何処でこのような珍しい草花を取るのかと尋ねられたが、アグネ・シャは決して秘密を漏らさず、こっそりついて来る者がいても上手く撒いてかわした。

アグネ・シャは孤児だった。父母は三年前に出稼ぎ先へ向かう途中、落石事故で亡くし、祖父母も早々に亡くしていた。

村人は幼くして両親を亡くした彼女を哀れんでくれたが、引き取って世話を焼こうと言ってくれる者は一人もいなかった。それは仕方ない事だったが、彼女はそうと割り切れるほど大人ではなかった。大人への強い不審感を抱き、警戒心が強く、慎重であると同時に大胆にもなった。決して侵入してはならない鳥人の森に入る事もその一つだ。

村の大人を出し抜き欺く嘘をつくことも上達した。健気で一生懸命な子供を演じる事にも余念がない。

大人は意外に嫉妬深い。金を稼ぎ過ぎる人間は嫌われた。だから彼女は常々稼ぎ過ぎないように、しかし生活が苦しくならないよう、計画的に採取する種類や量を調節した。それはこれまでのところ、とても上手くいっているように思われた。

ある日のこと、いつも通り誰にも後を追えぬよう注意深く森へ入

り、薬草などを採取していると、不意に背後から声をかけられ、彼女は驚き飛び上がった。

そこにいたのは見知らぬ美しい少年だった。彼女より五歳は年上に見える。薄汚れていたが、見たことのない美しい衣服を着ていた。「驚かせてすまない。近道のつもりでこの森を通ったら、迷子になったんだ。この近くに村はないだろうか。案内してくれたら、謝礼を払うよ」

彼女は了承した。謝礼に心惹かれたのではなく、彼が本当に困っていたからだ。

村へ向かう途中、彼は彼女を質問責めにした。村が何処にあるのか、どういう村で、どういった人々が住んでいるのか。

最初は根気強く答えていたが、その内容が彼女自身の事に及ぶに至ると、強烈な不安に襲われた。少年は明らかにお喋りだった。彼は彼女がこれまで必死に隠し通していた森の秘密を、他の村人に話してしまうかも知れない。そうしたら今まで通りの生活は出来なくなる。

彼女は彼を崖の縁に案内して言った。

「ほら、あれが私の住んでいる村よ」

彼が下を覗き込むと、彼女は彼を突き落とした。彼の姿が見えなくなるとうやく安心した。この森には誰も来ない。少年が見つかる事もないだろう。万一、彼が即死しなかったとしても、この高さから落ちたのだ。無事に済む筈はない。崖の下は鬱蒼とした森だ。辺りが静まり返ると、アグネ・シヤは満足そうに微笑んだ。

「さあ、薬草を取りに行かなきゃ」

晴れ晴れとした顔で彼女は身を翻した。

「……姉さんが人間は恐ろしいとしばしば話してくれたけど、本当だったよ」

少年は姉に言った。

「もし、僕の背に翼がなかったら、死んでるところだった。本当に恐かった。人間って本当、恐いね。子供や女の子でも油断できないって本当だね、姉さん」

ぶるりと身を震わす少年に、少年の姉が、渋面で頷いた。

「ええ、そうよ。今回は突き落とされただけだったから無傷だったけど、刃物で刺されたり鈍器で殴られてたりしたら、大変な事になつてたわよ。これに懲りたら二度と人間には近付かない事ね。でなかつたら、相手に気付かれる前に、殺してしまいなさい」

姉に諭され、神妙に少年は頷いた。

「判つたよ、姉さん。次にこんな事があつたら必ずそうするよ」

少年の言葉に、姉はにっこり微笑んだ。

「殺すにせよ、逃げるにせよ、私たち鳥人の住処や存在は、できるだけ人間に知られないようにしなくてはならないわ。私たちが暮らせる森は、そう多くはないのだから」

姉の言葉に、少年は不安そうな顔をした。

「ところで姉さん、あの子、殺しておいた方が良いのかな？」

姉は言った。

「殺せないようなら、無理する必要はないわ。だけど、殺せるものなら殺しておいた方が良いかもしれないわね。報復と同時に、他の人間に対する警告にもなるから。でも、あなたが恐いというなら、私が代わりにやってあげるわ」

姉は脅える弟に、慈悲深く微笑んだ。

The End .

(後書き)

十代の時にコバルトに投稿した「幸せはここにある」という学園恋愛小説(未発表)の作中小説がオリジナル。

長編にしようと思ったけど、あまり面白くなかったため、設定だけ流用して、ストーリーを完全別物に変更し、ショートにまとめたネタです。

たぶん集英社の1000文字文芸用に書いた作品の筈ですが、投稿したかどうかは記憶薄いです。

今作はバッドエンドなので、オリジナルのハッピーエンド版の恋愛物を書くかどうかは不明です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9099b/>

鳥人の森

2011年9月22日16時28分発行